

岡 政

秋 山 和 夫

一 はじめに

岡政は、明治四十一年三月、東京女子高等師範学校保育実習科を終了後、直ちに、岡山県師範学校附属幼稚園主任保母となつた。以来、昭和八年九月、病気のため同園を退職するまでの二十五年間ずっとその職にあつて、幼稚園教育の方法や内容の充実のために、地道な貢献をしてきたのである。

明治四十年代は、わが国の幼児保育の歴史においても、ひとつの転換期であつたと言える。例えば、フレーベル館主、高市次郎の改良恩物の発売、明治四十一年に出版された、中村五六・和田実共著の『幼児保育法』における、形式的な恩物中心主義保育への批判など、幼児の生活に着目した新しい保育観の台頭期であつたと言えるのである。

このような時代に東京女高師において、学生生活を送つた岡

は、新しい保育観の洗礼を受け、新しい保育、即ち、幼児の生活を尊重する保育の実践への期待と抱負をいだいて、岡山師範附属幼稚園へ赴任したのである。岡の保育実践のよりどころとなつたのは、当初は和田実の考え方であり、更には、倉橋惣三の保育理論であつた。

岡の日本保育史における位置づけを考えるならば、それは次の点に要約されるであらう。

第一は、わが国における新保育運動の先駆者であつた和田実、又、その運動のリーダーであつた倉橋惣三の保育理論を、彼女の保育実践の中で生かし、その理論の妥当性を実践の中で精力的に実証しようとしたこと。第二は、当時の東京女高師を中心とする新しい保育理論——それは主として倉橋によって唱導されたものである——を直接吸収し、それを自己の保育実践

の中で消化し、その結果生まれた新しい保育の方法や研究成果を、岡山県保育界のみならず、京都・大阪・神戸を中心とする三市連合保育会において発表し、倉橋理論を実践の側面でもバックアップすると共に、保育実践の質的向上に資したことである。

二 岡政の保育観の形成

岡の保育観形成にあずかって大きな力となったのは、和田実と倉橋惣三の二人である。和田は岡の女高師在学中薫陶を受けた師である。「幼児の生活全体を教育の対象とする」とか「幼児の生活は其根本に於て幼児自身の自己活動に外ならない」といった和田の主張に対して、岡は深い感銘を覚えた。

幼児の自発活動をもとにして教育をおこなう、という和田の保育理論の枠組をもって、現実の保育実践を見た時に、岡に多くの疑問が生まれたのである。「何もわからない私共が保育の実際を拝見して、何だか先生の理論と實際を異にしているやの感に迷いました」(岡政「和田先生の追憶」『学報めじろ』昭和五十一年)と岡は述懐している。

岡は女高師の附属幼稚園で教育実習をおこなう間に、その疑問をますます深めていった。例えば、遊戯の時間には、子ども

は定まった順番に蝶や鬼になり、その飛び方や左右の順序が間違っていたらそれを訂正するのが保育者の役割であり、手技の時間には保育者の考えたとおりの折り方を順序どおり幼児にさせ、泣く子やうまくできない幼児には手伝ってやってでも、作品を仕上げさせるのが保育者の役割であるといったことへの疑問である。このような現実に対して、岡は次のような激しいことばでその不満を表明している。

「幼児の創作工夫などつゆ許されなかったので、もし自由に何かやり出すと不行儀な子供として叱られるという誠にさういふ方法でした。こんなだったら、どこに遊戯らしく嬉々として楽しみ、欣々として満足し、しかも、その間に子供は自ら先生の理想とする方向に進んで行く事ができうるのだろうかという激しい激しい矛盾と疑惑とが出てたまらなかつたのです」(岡政「同上回想」)

このような保育についての疑問を、岡は和田実に対して積極的に投げかけていった。これに対して和田は、大要次のように岡に答えたという。即ち、「本よりも何よりも沢山いる子供の先生から学びなさい。例えば、積木もこちらがその数や並べ方をあらかじめ決めておかないで、そのままバラッと出して見なさい。折紙も無理に折らすから泣き出したりするので、ただ、

紙それ自身を与えてみなさい。どんなにして遊ぶか子供が教えてくれます」(岡政「同上回想」)と。このようにして「子どもから学ぶ」という態度が岡の中に育っていくことになったのである。

「子どもから学ぶ」という保育の姿勢に支えられた「幼児中心主義」の保育理論と、その実践の立場をより強固なものとして岡の中に定着させ、それを発展させることになったのは、いまひとり倉橋惣三の存在であった。

東京帝国大学で心理学を専攻した倉橋は、岡が東京女高師の学生の頃、幼児心理の実地研究のために、東京女高師附属幼稚園をしばしば訪れていた。この間に、倉橋は和田実の保育観に基本的に賛意を表し、さらに、和田の「生活保育」の考え方を深化・発展させていくことになったと考えられる。倉橋の幼児の観方、保育に対する考え方や、幼児に対する愛着ある態度からも、岡は個人的にいろいろと啓発されたのである。

ところで、倉橋はその小学校生活を岡山で送った。岡山の小学校時代の倉橋の恩師、国富友次郎は、明治三十三年から昭和十五年まで、実に四十一年の長きにわたって、吉備保育会の会長をつとめ、岡山県下の幼稚園教育の振興につくした。このため、国富は吉備保育会の総会などには、倉橋を講師としてしば

しば岡山に招いた。このようなこともあって、岡は女高師卒業後も倉橋に師事し、倉橋の来岡の折のみでなく、事あるたびに上京し、倉橋から保育に関する教えを直接に仰いだのである。

こうして、岡は自己の保育実践の理論的根拠を倉橋のそれ求め、ついには倉橋理論の正当性を実践によって証明し、幼児中心の保育の理想的な姿を確立しようとしたのである。

和田実によって開眼され、倉橋惣三によって育てられた岡政の保育実践について、次のような評価がなされている。

「和田実の教育理想は、夫人豊子および、岡政両女史を中心とするそれぞれの協力者グループの努力によって、東西に自然保育の実を結んだ」(芦田昇『自然保育』昭和三十四年)

「おそらく、岡政先生ほど和田理論やさらに、倉橋理論を具体的、徹底的に実践して、独自の保育を展開した人は、外に例をみないのではなからうか」(坂元彦太郎「岡政先生のことども」『学報めじろ』昭和五十一年)

これらの評価に象徴されるように、岡政の功績は、和田・倉橋によって提唱された「幼児の自然の生活形態のままで保育する」という保育理念を実践的に具現したという点に求めることができる。

三 岡政の保育の理論と実践

岡が岡山県師範学校附属幼稚園へ主任保母として赴任した明治四十一年の岡山県下の保育の主流は、「園児に知識を与える」ということであり、小学校教育の内容や方法の程度を下げたものが幼稚園の保育であるということであった。

したがって、当時の保育室では小学校の教室と同じように、園児は二人ずつ机に就いて正面を向き、また、保母のための教授用の黒板や教卓が正面に並べられていた。保育は時間割によってなされ、ベルの合図が用いられた。

幼児の「生活を生活で生活させる」ことを理想とする新保育観の洗礼を受けた岡は、このような古い保育に漸次改革のメスを入れていった。幼児の自発活動を尊重するためには環境からというわけで、幼児に教えるための教師用黒板を先ず取り払い、それを幼児が自由に使うことのできる黒板として再生させた。机も二人机を廃しグループ机にし、幼児相互の話し合いや助け合い活動ができ易いように改めた。教師用の教卓も取り払われ、朝の会集や鐘の合図も廃止された。時間割による形式を重視する保育から、幼児の生活をふまえ、幼児の自発活動を重んじ、創造性を伸ばす方向の保育へと改革がおこなわれていった。この過程で、これまでの保育の中で重要な役割を果たして

いた恩物も、明治四十三年頃から単なる遊具として幼児に自由に取り扱わせることになった。

保育についての岡の基本的な考え方は、「園児に与えたり・させたり」といった保母を中心にしたものでなく、「幼児の生活に保育の目的を近づけていく」べきだということであった。

岡は自己の保育の考え方とその具体的方法を、次の四点に集約して提言している。

- 1 すべての形式的束縛を脱すること。
 - 2 新保育を実施すれば、組を固定することはできず、受持を厳密に決めることができないので、組を廃し、受持時間の長短を自由にする。
 - 3 保育室はもちろん、園内のすべての部屋を園児が自由に使えるように解釈する。
 - 4 鐘をならして時間の合図をする必要もなく、ことに、あのベルの音は神経を過敏に導くため、鐘の合図を止め、保母の自律性を重んずる。(『京阪神連合保育会での岡政の発表』『京阪神連合保育会雑誌』四十七号大正十三年)
- ここに、これまでの岡の保育実践とその考え方が集約されている。それは、幼児の生活や自然性を重んずることが前提とされており、幼児の興味、関心の重視、幼児の個性への着目とい

った保育の重要な原則が提起されているのである。

このような考え方の具体的な展開として、ひとりひとりの幼児の特性を明らかにすること、更に、年齢別による組を中心とする保育を否定する方向を打ち出すのである。前者は「幼児ノ素質測定ト教育上ノ試ミ」という研究にその見解が示されている。ここでは「教育を各個人に適應さす為ニ」幼児の素質測定を必要を説き、その方法として素質検査による科学的方法と、保母による幼児の日常生活の観察をあわせ用いることを提言している。この結果明らかになったことは、同年齢の子どもであってもその興味、関心には大きな懸隔があり、「同年齢の子どもであっても、そこに三年半からの相違を持っている」ということであった。

このような幼児の現実に接した時、年齢別に編成した学級中心の指導は、幼児個々の生活や興味に即した保育にならないと岡は考えたのである。もっともこの問題は、昭和二年に開かれた第三十四回京阪神連合保育会の研究課題のひとつとして、幼児ノ年齢別ニ依ラサル編制法ノ得失ニツイテ」としてとりあげられている。この部会では、概して能力別、性別などのグループの可否といった技術的な問題に論議が集中していたと言える。

岡はこの部会には出席していなかったようであるが、別の機

会にこの点について次のように述べている。組を作る観点として、1 幼児の素質に適應した組、2 幼児の個性の欲求に應じた組、をその時、その場に應じて作る、いわゆる「移動的編制法」を提唱するのである。その理由は「幼児の生活は多様でありますから、従ってその編制も多様になることは当然で、組を限定することはどうしてもできません」。

岡によれば、赤組、黄組といういわゆる学級は事務処理上のものであつて、幼児の保育に当たってはこの組は解かれ、それぞれの活動に即した組（グループ）が作られるべきであるとするのである。組を主体としない保育においては、どの保母も全園児を保育の対象としなければならない。保母は活動別グループの指導を担当するため、その活動には、学級、年齢にかかわらずなく興味を持つ子が集まってくるからである。

一日の保育が終わったあと、その園のすべての保母は、各自が分担したグループの幼児の活動状況を報告し合う。その中で、それぞれの幼児の活動状況などについての意見が交換され、次の日のための環境設定や、活動に偏りのある幼児のための設定保育をすることの計画が樹立されることになる。

この体制をとりうる大前提は「保母相互の和と協力である」と岡は断言する。和と協力の精神のないところには、和田実の

唱える自然保育、倉橋惣三のいう誘導保育の実践はなし得ないというのが、岡政の実践を通して得た結論であった。

四 岡政の保育界への影響

「倉橋先生のお話は面白いがなかなか実践しにくい」という評価は大阪においても岡山においても同様であった。そのような中で岡は「倉橋先生の理論は絶対に実践化される」との気をはいたのである。

岡の保育に共鳴する幼稚園も大正六年頃から岡山県下に現われ始めた。しかし、岡の保育法を導入しようとした園でも、教具とか備品の改良工夫の如く、部分的に取り入れうるものを吸収したにすぎない。保母中心の保育を幼児中心の保育へという百八十度の転換は不可能であった。

岡山市の保育会には「京阪神連合保育会」の主張によりどころをおく人たちがあった。「京阪神連合保育会」の主張は、倉橋のように新しい保育形態への新生面を開拓しようというよりは、幼児の健康面と、手技または製作物への新しい配慮を加えながら、漸進的に保育を改革するという点にあったと言えよう。京阪神連合保育会では、三、四年に一度は倉橋に講演を依頼しながらも、その理論の実践化には多分に批判的であったと

いう。倉橋に対する批判は、岡山における岡政に対する批判にも通じたのである。したがって、京阪神連合保育会（昭和二年から関西連合保育会と改称）の主流的動向に共鳴する岡山の保母たちは、岡の新しい保育には必ずしも同情的でなく、批判的言辞も少なくなかったという。

岡はそのような情勢を十分承知のうえで、京阪神連合保育会で何回か自己の見解を発表した。岡の発表に対しては、会の態度はいつも冷たかったというのが、後年の岡の述懐である。

還曆を迎えた岡は、昭和二十三年から十余年間、倉敷市御国幼稚園の顧問兼主事として再度幼児教育にかかわった。岡は一年八十八歳で他界したが、死の直前まで幼児教育関係の文献に眼を通していたと言われる。岡の保育理念は現在、倉敷市御国幼稚園に継承され、再生していることを附記しておこう。

（岡山大学）

（注）一八八七年（明治二十年）生—一九七五年（昭和五十年）没

参考文献

- 岡山県保育史編集委員会『岡山県保育史』フレールベル館 昭和三十九年
- 岡山大学教育学部附属幼稚園『八十年のあゆみ』 昭和三十九年